

気候変動集団移住のプランニング過程：フィジー・ヴニドゴロの事例

Leativa Sonya OKESENE

キーワード: 気候変動, 計画移住 (planned relocation), 包括的合理的計画モデル (comprehensive rational planning model), 参加型計画モデル (participatory planning model).

1. 研究の背景および目的

気候変動の影響、とりわけ悪影響や災害により、個人、集団および共同体（これが最も望ましい）は従来の居住地から計画移転先への移転を強いられる。このような移転にあたっては、効果的な計画およびマネジメントの他、移転の対象となる共同体や他の責任ある利害関係者による、協力的で積極的な参加が求められる。気候変動に起因する移転計画に関しては、関係する組織や利害関係者の性質に各々応じて計画が策定される。包括的合理的計画 (comprehensive rational planning) においては、利害関係者は計画策定手続全般において正当な管理権限や発言権が体系的ないし手続的に確保されている。とりわけ技術的科学的な手法においてはそうであり、これはこういった概念が都市計画や空間計画の基底をなすことに類似する。一方で、参加型計画 (participatory planning) は利害関係者の協働や積極的な参加を促進する。特に重要なのは、対象となる共同体に移転計画への一定程度の参加が保障されている点である。本論文は Vunidogoloa 市の事例研究に基づいて、フィジーにおけるこのような共同体の移転がどういった結果をもたらし、課題を抱えるのかについての調査から出発し、気候変動に起因する移転計画の策定過程の評価を試みるものである。この評価は、対象となる共同体の移転計画の形成に影響する要素の識別および吟味に及ぶ詳細なものである。更に、本研究では多様な利害関係者と共に共同体は移転計画の策定に参加することの意義についての検討も試みる。

2. 研究の手法

本研究はその目的に沿うものとして、半構造対面インタビューを通じて収集した一次データおよび文献や公的白書において評価されたデータを収集した二次データその他、既存の政策および規制に依拠する。インタビューは8名の回答者に対して行ったもので、回答者は政府関係者、フィジーの Suva に拠点を置く非政府組織および国際組織の関係者から成る。このインタビューの目的は、当該回答者が Vunidogoloa 市の移転計画の全過程に対してどのような経験と認識を有しているのかを記録する点にある。これらのインタビューにより得られた情報には、Vunidogoloa の移転計画がどのように策定されたのか（又は策定され得たのか）についての知見を得ることに加え、Vunidogoloa の経験からより多くを学ぶことで今後の移転計画への注意点を学び得るという意義がある。

3. 結果および結論

本調査からは、Vunidogoloa 市の移転が部分的には成功を収めたプロジェクトであったものの、人々の需要および彼らが計画に及ぼす影響が計画上適切に反映され、またどの共同体がどの程度計画策定に参加できるのかについての法的な枠組みがなかったため、当該部分については今後の改善を要するという結果が得られた。実際には、Vunidogoloa の移転プロセスは確定した計画なしに遂行されたために複雑なものとなった。このことは、政府および参加者らが、主には包括的合理的計画を反映して行われたアセスメントや調査により得られた結果から、移転プロジェクトに必要なあらゆる資源を、自らに都合の良いように精選する結果を招いた。参加計画に関しては、Vunidogoloa 市の移転計画の事例においては、計画のプロセス段階に応じて共同体の参加の程度が異なっていた可能性があったと評価された。もっとも、本研究は、当該移転計画においては共同体としてのオーナーシップを保有し、十分な権限をもってハイレベルの参加をしたと結論づけた。